

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K02722

研究課題名(和文)中国語における教育文法設計のための横断的文法研究

研究課題名(英文)A Study on Educational Grammar Design in Chinese

研究代表者

勝川 裕子(KATSUKAWA, Yuko)

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：40377768

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、まず中国語母語話者による言語実態を観察した上で、日本人中国語学習者を対象とする調査を通じて彼らが産出する中間言語形式を質的・量的側面から実証的に記述した。課題を遂行するための個別課題として、可能表現の導入方法、禁止表現の統語的・語用論的研究、多項連体修飾構造における語順問題、物語構築における注視点の移動と構文選択の4点を取り上げ、文法項目の導入範囲と各項目の相関関係を中国語学的見地から横断的に分析し、導入順序の基準構築を図ることにより、目標言語の言語実態と学習者の習得発達過程を反映した、より実用的な教育文法の設計を目指した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教育現場への応用を提起する中国語学研究は数多く存在しているが、その多くが中国語が持つ言語学的特徴から導き出される仮説的試案であり、実際に検証されることのないまま文法シラバスとして教育現場で採用されてきた。本研究では習得が難しいとされる文法項目に対し、横断的文法研究を行うことで文法項目の導入範囲と導入順序の試案を提起し、同時に当該項目に対する学習者調査を行い、データを構造分析することで試案の妥当性を検証した。こうしたアプローチは中国語学と第二言語習得の各研究領域における諸課題に対し、より広い視点からの考察を可能にし、学術上の理論と教育的実践を有機的に結びつけることを可能にすると考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we first observed linguistic phenomena among native Chinese speakers. Subsequently, we empirically described qualitatively and quantitatively the interlanguage produced by Japanese learners of Chinese through a survey. To achieve this, specific tasks included: (1) introducing methods for potential expressions, (2) syntactic and pragmatic studies of prohibitive expressions, (3) addressing word order issues in multi-nominal modifier structures, and (4) analyzing shifts in focal points and syntactic choices in narrative construction. These four points were comprehensively analyzed from a Chinese linguistic perspective to establish criteria for the scope of grammar topics and their interrelations. The aim was to design a more practical educational grammar reflecting the linguistic realities of the target language and the developmental process of learners' acquisition.

研究分野：中国語文法、中国語教育

キーワード：中国語 教育文法 中間言語 可能表現 禁止表現 多項連体修飾構造 物語構築 注視点の移動

1. 研究開始当初の背景

我が国における中国語教育では、これまで中国語学研究成果を反映させた教育文法、文法インストラクションを採用してきており、個々の文法知識の記述及びその体系化については一定の蓄積があるものの、学習者の内部で起こる言語処理や学習者の発達過程を視野に入れた考察、即ち第二言語習得研究成果を反映させた研究はあまりなされてこなかった。そして、個々の文法範疇、文法知識に関する研究が深まる一方で、それぞれを有機的且つ包括的に結び付け、その成果を教育の現場に還元していくといったアプローチは充実しているとは言い難い。これは、中国語教育の現場で観察される教育的妥当性よりも、中国語学研究における記述的・説明的妥当性を重視した立場の現れであり、学習者の内部で起こる言語処理やその発達過程に対する考察が欠けていることを示唆している。

また、一見、記述的・説明的妥当性を満たしているように見える文法シラバスにおいても、導入する文法項目の選定や導入順序の決定は教授者の直観と経験則に基づいたものが多く、客観的な基準や方法論は未だ得られていない。文法項目の導入順序については、習得順序および難易度の観点から捉えなおさなければならないとする主張が 2000 年代より中国国内の対外漢語教育界を中心に広がりを見せ、使用頻度の高いものから導入する、内部構造がシンプルなものから導入する、既習の文法項目を応用できるものから導入するといった複数の原則が提唱されてきた(楊徳鋒 2001、呂文华 2002、卢福波 2003、邓守信 2006 等)。しかしながら、「どのような文法項目・構文をどのような順序で導入すべきか」という基準及び検証可能な根拠は未だ示されておらず、それぞれの原則をどのように調整し、どのように運用するかについて具体的に言及した論著はほとんど見られない。

2. 研究の目的

上記で述べた状況に鑑み、本研究ではまず、中国語母語話者による言語実態を観察した上で、日本人中国語学習者を対象とする調査を通じて彼らが産出する中間言語形式を質的・量的側面から実証的に記述していく。そしてその上で、文法項目の導入範囲と各項目の相関関係を中国語学的見地から横断的に分析し、導入順序の基準構築を図ることにより、目標言語の言語実態と学習者の習得発達過程を反映した、より実用的な教育文法を設計することを最終的な目的とした。

本研究では上述の課題を遂行するための個別課題として、可能表現の導入方法、禁止表現の統語的・語用論的研究、多項連体修飾構造における語順問題、物語構築における注視点の移動と構文選択の 4 点を取り上げた。 に関しては、従来の中国語教育では複数の文法項目にまたがって導入される表現形式であり、導入される時期も順序も異なることから、学習者の習得状況は中上級レベルに至っても芳しくないことが観察される。本課題では、同一ジャンルに属する表現を体系的に捉えるためのシラバス、教育文法の設計を目指した。また、 に関しては、多項連体修飾構造の語順と意味機能は密接不可分の関係にあり、語順を決定するには数量詞の位置が参照点となるが、従来の中国語教育においては取り上げられること自体少なく、看過されてきた項目と言える。事物を詳細に描写する役割を担う名詞句構造は、その言語「らしさ」の一端を担うものであり、中級レベル以上の作文教育などで意識的に導入すべき項目であると考え。 に関しては、一通り文法項目を学んだ学習者が目標言語で物語を構築する際、文法的には正しい

表現であっても、母語話者のそれとは異なり、どこか不自然に感じられる点に着目し、これを注視点の移動と構文選択の観点から考察を試みた。これまでの教育文法は、各種項目・構文を適格に産出することを目標としてきたが、これに加え、当該の項目・構文がどのような環境下で選好されるかといった語用論的な観点を取り入れた設計が必要であることを主張した。

3. 研究の方法

本研究では設定した課題を遂行するにあたり、以下の3つの研究方法を採用した(カッコ内は当該の研究方法を採用した個別課題を示す)。

(1) コーパスに基づいた中国語分析(個別課題)

本研究課題は言語研究であり、報告者(勝川)にとっては外国語研究であることから、まずは調査対象となる言語事象について、大量の用例を収集し、そこで得られた言語事実と既存の理論を結び付け、理論の再構築を図るといった実証的な手法を採用した。用例の収集にあたっては、紙媒体の小説や新聞をはじめ、インターネット記事や各種コーパス(CCL、BCC)などを利用し、インフォーマントチェックを受けた上で論拠となる言語事実として示した。また、インフォーマントによる言語内省(文成立の可否や成立条件などを判定する作業)を通じて仮説の妥当性を図るという本研究課題の性質上、用例の一つ一つに対し、インフォーマントと綿密な議論を重ねた。

(2) 日本人中国語学習者の習得調査(個別課題)

日本人中国語学習者を対象とした習得調査については、報告者(勝川)が在籍する大学の学部1年次クラスと2年次クラス(いずれも第二外国語として中国語を学ぶ30名定員のクラス)を対象に調査を行った。1年次クラスでは学習者の各発達段階における中間言語の変容を捉えるために初修の文法項目に対して調査を行い、質的観察を行った(個別課題)。2年次クラスに対しては、既習文法項目の習得状況を把握するための量的調査を行い、中国語学習者が産出した中間言語を回収し、得られたデータに対し意味・統語の側面から分析を行った(個別課題)。

(3) 中国語/日本語母語話者の言語実態調査(個別課題)

日中両言語において同一の事態を描く際に選択される構文の異同を観察するために、本研究では中国語母語話者96名、日本語母語話者97名に対し4コマ漫画を用いた言語実態調査を行い、中国語と日本語の物語構築のあり方を注視点の移動と構文選択の観点から考察した。中国語母語話者のデータに関しては、中国の大学に在籍する複数の研究者による協力を得た。

4. 研究成果

本研究では上述の課題を遂行するための個別課題として、可能表現の導入方法、禁止表現の統語的・語用論的研究、多項連体修飾構造における語順問題、物語構築における注視点の移動と構文選択の4つの観点から考察を行った。以下、それぞれの個別課題の概要と研究成果を記す。

(1) 可能表現の導入方法について

中国語の可能表現は、助動詞や可能補語など複雑に分化しており、複数の文法形式が一つの

表現カテゴリーに属するという特徴を持つことから、いずれの表現形式を選択するかという点において誤用が起りやすい。本課題では可能表現の習得状況を把握するために、報告者(勝川)が在籍する大学の2年次クラス(中級中国語)において筆記調査を行った。可能の助動詞及び可能補語は共に1年次に導入済みの既習項目であるが、産出された中間言語に対して構文分析を行った結果、予測通り可能補語形式の習得が著しく低く、使用の回避及び助動詞の過度な適用が観察された。この調査結果を受け、1年次クラス(初級中国語)2クラスを調査対象に可能表現の導入調査を行った。1クラスはこれまでの文法シラバス通り導入し、もう1クラスは勝川2015で提示した導入試案に基づいて導入を行い、一定期間を経た後に習得調査を行った。結果、導入試案の有効性を確認した。

(2) 禁止表現の統語的・語用論的研究

可能表現の習得研究から派生したテーマとして、禁止表現の中でも“不能”と“不要”を取り上げ、それぞれの使用分布と統語的特徴について中国語学的観点から考察を行った。両形式は共に禁止義を表すものの、“不要”が<禁止>を表すに至る拡張ルートや“不能+VP”において<不可能>と<禁止>がリンクし得る動機付けについて追究した先行研究は少ない。また導入時期においても大きく隔たっていることから、両形式を表現上同一のジャンルと認識し且つ使い分ける事ができる学習者は少ないことが明らかとなった。本課題では、両形式が元来の語義を色濃く受け継いでおり、これが禁止のニュアンス、ひいては語用論的意味の相違として反映されていることを指摘した。

(3) 多項連体修飾構造における語順問題

中国語では“那个戴眼镜的人”(あの眼鏡をかけた人)と“戴眼镜的那个人”(眼鏡をかけたあの人)はいずれも統語的に成立し、意味的にも大差がないことから、中国語学習者はこのような名詞句構造における連体修飾節の語順に関しては無頓着であり、教学上においても取り上げられることはほとんどない。しかし、文脈の中で用いられる場合、“那个戴眼镜的人”と“戴眼镜的那个人”は決して任意に選択されるものではない。本課題では、日本語の数量表現と対照させながら、構造別に分析を行い、連体修飾節における(指)数量詞の位置がその前後に配置される修飾成分の意味機能を見極める指標となりうることを明らかにした。併せて、特定の構造において偏ってエラーが産出されることを指摘し、教学上注意すべき点について提言を行った。

(4) 物語構築における注視点の移動と構文選択

一通り文法項目を学んだ学習者が目標言語で物語を構築する際、文法的には正しい表現であっても、母語話者のそれとは異なり、どこか不自然に感じられる。このような現象は、特に中上級レベルにおいて多く見られる。本課題では、この問題に対し、中国語母語話者(96名)と日本語母語話者(97名)に対し4コマ漫画を用いた言語実態調査を行い、中国語と日本語の物語構築のあり方を注視点の移動と構文選択の観点から考察した。

本課題では、まず、中国語の物語構築と中国人日本語学習者の物語構築の特徴(先行研究における指摘)がおおむね一致していることを確認し、中国人日本語学習者の中間言語の在り方が、彼らの母語である中国語の影響を受けていることを指摘した。また、中国語ではコマ間だけでなく、同一コマ内であっても登場人物一人一人に対し描写を行う傾向が日本語より多く見られ、注視点の頻繁な移動が観察された。この現象は構文選択にも影響を与えており、日本語では埋め込み文を多用することで注視点の固定される傾向が見られるのに対し、中国語では複文構造が好まれることにより、注視点の移動が頻繁に起こることを指摘した。調査から得られたこれらの特徴は、日

中両言語におけるヴォイス形式(授受表現、受身表現)や移動表現の選択に注視点の置かれ方が深く関わっていることを示唆している。日中両言語における注視点のあり方を明らかにすることで、これまで個別に研究対象として取り上げられてきた各文法項目を有機的に結び付けることができることを主張した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 勝川裕子	4. 巻 -
2. 論文標題 中文可能表達習得難点研究 - 以日本學習者為例 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『第一屆名古屋大学・屏東大学文学交流論文発表会論文集』	6. 最初と最後の頁 15-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 勝川裕子	4. 巻 第3号
2. 論文標題 中国語の禁止表現 “不要” と “不能” が表す<禁止>	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『名古屋大学人文学研究論集』	6. 最初と最後の頁 143-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 張セイイ，玉岡賀津雄，勝川裕子	4. 巻 第8号
2. 論文標題 書字と音声提示のギャップ：日本人中国語学習者による読解と聴解の比較	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『漢語与漢語教学研究』	6. 最初と最後の頁 85-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 張セイイ，玉岡賀津雄，勝川裕子	4. 巻 第31号
2. 論文標題 中国語語彙能力テストの開発 HSK三級レベルの日本人中国語学習者のデータによる評価	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『ことばの科学』	6. 最初と最後の頁 21-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勝川裕子	4. 巻 第1巻
2. 論文標題 中国語の数量詞フレーズの日本語訳について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『中文日訳研究の基礎』	6. 最初と最後の頁 22 45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勝川裕子	4. 巻 -
2. 論文標題 關於中文名詞性結構的語法特徴 —以語序及語法為中心	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『第三届名古屋大学・屏東大学文学交流論文発表会論文集』	6. 最初と最後の頁 63 68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勝川裕子	4. 巻 第37号
2. 論文標題 日中両言語における物語構築の特徴 —注視点と構文選択の観点から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『ことばの科学』	6. 最初と最後の頁 39 56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計21件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 18件）

1. 発表者名 勝川裕子
2. 発表標題 中国語における名詞句構造の文法的特徴 語順と意味機能を中心に
3. 学会等名 2023年東アジア日本学研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 勝川裕子
2. 発表標題 注視点の移動とヴォイスの選択
3. 学会等名 第7回上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 勝川裕子
2. 発表標題 中国語の物語構築における視点と構文選択の特徴
3. 学会等名 中国語教育学会第3回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 勝川裕子
2. 発表標題 漫画描写にみられる中国語の「視点」
3. 学会等名 2022年東アジア日本学研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 勝川裕子
2. 発表標題 中文可能表達習得難点研究 - 以日本學習者為例 -
3. 学会等名 第一屆名古屋大学・屏東大学文学交流論文発表会（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 勝川裕子
2. 発表標題 中国語における<描写>と<限定>
3. 学会等名 2021年日本言語文化研究学術研究会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 勝川裕子
2. 発表標題 視点選択からみる中国語の物語構築
3. 学会等名 第6回上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 勝川裕子
2. 発表標題 日本人学習者の中間言語からみる中国語の可能表現
3. 学会等名 華中科技大学日本語科設立20周年記念大会 日本語・日本文化国際学術討論会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 勝川裕子
2. 発表標題 視点の移動とヴォイス 日中受身文を中心に
3. 学会等名 2019年日本言語文化研究学術研究会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 勝川裕子
2. 発表標題 中国語名詞句における数量詞の意味と役割
3. 学会等名 第5回上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 勝川裕子
2. 発表標題 中国語の禁止表現 “不能” と “不要” が表す 禁止
3. 学会等名 日本中国語学会東海支部例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 勝川裕子
2. 発表標題 中国語の禁止表現における統語的制約と語用論的特徴
3. 学会等名 2018年日本言語文化研究学術研究会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 勝川裕子
2. 発表標題 關於中文名詞性結構的語法特徵
3. 学会等名 第一屆名古屋大学・屏東大学文学交流論文発表会（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 勝川裕子
2. 発表標題 日中両言語における物語構築の特徴
3. 学会等名 第5回上海財経大学・名古屋大学合同研究会－言語と外国語教育－（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 勝川裕子
2. 発表標題 中国語における 禁止 の類義分析－コーパスから見えてくるもの
3. 学会等名 2024年東アジア日本学研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 勝川裕子
2. 発表標題 中国語の数量詞フレーズと習得上の難点について
3. 学会等名 第8回上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会（国際学会）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 張麟声、杉村博文、勝川裕子、丸尾誠、橋本修、劉劍、山田敏弘	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日中言語文化出版社	5. 総ページ数 139
3. 書名 『中文日訳研究の基礎（一）』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------